

一条朝における漢詩文素養に関する社会規範と紫式部

山 本 淳 子

はじめに

『紫式部日記』 消息体は、漢詩文素養についての記述を次のように計六箇所にわたって行なっている。

I、清少納言批評で、「真名書き散らし」を批判し、その素養の程度を「まだいと足らぬこと多かり」と評する記述

II、紫式部が家の女房から「なでふ女が真名書は読む」と陰口を言われる記述

III、一条天皇に『源氏物語』中の漢詩文素養を指摘され、内裏女房から「日本紀の御局」とあだ名をつけられる記述

IV、紫式部が漢詩文素養を身につけた経緯の記述

V、「男だに、才がりぬる人は、いかにぞや。はなやならずのみ侍るめるよ」と人に聞いてから、漢詩文素

養を隠しているとの記述

VI、彰子への「新楽府」進講の記述

これらの箇所は、それぞれ独立して取り上げられ、論ぜられることが多い。だが筆者はかねて、『紫式部日記』の漢詩文素養への言及はその全てを文脈として合わせ読まないと内容が把握できないと考えてきた。また『紫式部日記』と同時代の思潮に照らして考察することが必要だとも感じてきた。時代の感覚を知った上でこれらの記述を合わせ読むと、個々の記述を断片的に読んでいた時には行間に沈んでいた紫式部の主張が浮かび上がってくる。紫式部は、どういった状況のもとで何を主張しているのか。またそれは何を意味したのか。本稿ではそうした問題について考察した。

一 女性と漢詩文素養

最初に、一般社会における状況を確認しておく。『紫式部日記』が書かれた一条朝、女性と漢詩文の間には複雑な親疎関係があった。それは漢詩文が平安時代中期以降、第一に男性社会のものであったことによる。旧稿⁽¹⁾の繰り返しにもなるが、一条朝前後の女性と漢詩文との親疎の在り方について、歴史史料を含む諸資料から筆者の得た見解は、次のとおりである。⁽²⁾

十世紀初頭以降の貴族社会においては、漢字の読み書きが可能な女性はかなりの割合で存在し、仏典を読んだり文書に自署したりすることは日常的に行われていた。また内裏の女官には漢文で書かれた文書を理解する

者がおり、中には自ら漢文の文書を作成した者がいた可能性もある。しかし一般には、女性^Aが自ら作品として漢詩文を作ることではなく、もしそれがなされた場合には極めて特異な例と言えた。それは当時、男性官人が公的世界と私的世界の両方で生活し、したがって両方の世界の言語である漢文体と和文体を使用し得たのに対し、女性^Bは多く私的世界を居場所の中心としたため、必然的に漢文体との交渉が稀となったことによる。

それは当初、男女の生活実態から自然にもたらされた状態だったが、やがて規範化した。男性のみならず女性の側においても、女性ならば和文・和歌等のかな文学に親しむものと限定する見方が生まれた。漢文は公的世界を意味し、女性が漢文に親しむことは公的世界に介入することというニュアンスを持ったからである。キサキや女官など明確に公的立場にある女性は別として、一般女性については、漢詩文素養は男性社会・公的社会との境界を侵犯するものとされた。

ところが一条朝においては、男性社会において漢詩文が遊興的に流行したため、私宴や日常会話など、私的世界にまでそれらが持ち込まれることになった。勢い、女性たちと漢詩文との垣根は低くなった。漢文の詩句や故事を知ることが、遊びの場での知のおしゃれと認められ、女性^Cがそれに対応することが賞賛された。またそのレベルは類書等から手軽に得られる程度で十分だった。

このように、一条朝においては、女性と漢詩文の親疎について、二つの考えが同時に通行した。一つは、女性^Dは漢詩文に親しむべきではないといういわば守旧派の価値観、もう一つは、女性も漢詩文に親しむべきとする時流追随派の価値観である。

傍線部について個別に説明を加える。Aは、九世紀前半『経国集』の有智子内親王の作以来、明確に女性の

作と知られる漢詩文学作品が伝わらないことを主な証左とする。『大鏡』⁽³⁾には、高階貴子が内裏の作文に文を奉ったという記述があるが、それを裏付ける資料は伝えられず、真偽は不確かである。一方、和歌や和文で漢詩文学作品や中国の故事に基づいたものや、漢語由来の表現を使ったものは、女性の作の中にもごく一般的に見受けられる。このことから、漢文を用いて作文・作詩することは男性の行為、漢詩文を典拠にした和歌や和文をすることは男女を問わない行為という認識があったことが見受けられる。

Bは、天徳四年歌合漢文日記の一文、歌合開催の経緯を記した次の箇所から推測される。

去年秋八月、殿上侍臣鬪詩、而時、典侍命婦等相語曰、「男已鬪文章女宜合和歌」。

(『内裏歌合 天徳四年』漢文日記)

(4)

男性官人の鬪詩の後、内裏の典侍や命婦など女性らが、「男性が詩を合わせたならば女性は和歌を合わせるのがよい」と提案し、この度の開催になったという。このことから、この時期女性自身の側に、自らの第一文芸は漢詩でなく和歌であると限定する意識が生まれていたことが見て取れる。

Cについては、『枕草子』⁽⁵⁾が活写するところである。またDについては、小松登美氏はつとにこれを「たてまえとほんね」と呼ばれた。女性には漢詩文と疎遠であるべきという「守旧派」が「たてまえ」、漢詩文に親しむべきという「時流追随派」が「ほんね」ということである。だが、例えば男性や所謂「里の女」などの層には、守旧派の価値観をそのまま本音とした人々も、少なからずいたのではないか。また一方で、『枕草子』の

定子後宮においては、漢詩文への親近を示すことがむしろ規範として求められた。そうした場では、本音では漢詩文に疎遠でいたい女房が、たてまえ上それに親しんだということも十分考えられる。筆者は、二つの価値観が社会に同時に通行してはいたが、それらの優劣は一樣でなく、性別・場・階層・個人の志向等によって多様な認識が持たれていたと考えている。

ところで、一条朝の女流文学は右のような状況をどのような状況をどのように書き留めているだろうか。

『和泉式部日記』の次の場面では、こうした二重規範が和歌の贈答中に顕われている。

御文あり。「おぼつかなくなりければ、参り来てと思ひつるを、人々文つくるめれば」とのたまはせ
たれば、

いとまなみ君来まさずは我行かむ文作るらん道をしらばや

をかしと思して

わが宿にたづねて来ませ文作る道も教へんあひも見るべく（『和泉式部日記』十一月頃 七三・七四頁）

敦道親王から、自邸で漢詩文の会が開かれることになったため和泉式部宅に行けなくなったとの文が届く。

和泉式部は歌で「では私が参りましょう、詩作の方法を知りたいわ」と応ずる。親王は返歌で「いらっしやいな、詩作の方法も教えよう、逢瀬もできようから」と答えている。和泉式部の歌は、彼女が漢詩を作る方法を知らないことを前提としており、女性は漢詩文を作らないという規範を、和泉式部も遵守していたということ

がわかる。しかしこの歌で、和泉式部はその規範を破って詩作の方法を知りたいと言っている。むしろ本気ではなく、そうしてまで逢いたいということである。これは彼女の媚態である。すぐれて（男性的）なイメージをままとっていたであろう詩作の世界に、女性の方から踏み込みたいと、男女の関係にある男性にもちかけ、彼を刺激しているのである。もちろん詩作が負っている性意識は身体的なそれではなく社会的なものではあるが、それでも規範の侵犯は官能の香りを帯びただろう。もとはといえば「逢瀬ができない」という沈んだ状況での贈答だったが、贈答後はむしろ二人の思いが確認されている。つまり、和泉は二人の恋を盛り上げる効果を狙って「文作る」を詠み込んだ歌を贈り、その目論見は成功した。女性と詩作とは疎遠だという教科書的規範を、彼女はうまく利用したのである。

次は『枕草子』の例である。漢詩文に積極的に親しんだ清少納言だが、その方法については弁えもあった。藤原齊信が難題を送りつけてきた時のことである。

見れば、青き薄様に、いと清げに書きたまへり。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。「蘭省花時錦帳下」と書きて、「末はいかに、末はいかに」とあるを、「いかにかはすべからむ。御前おはしませば、御覽せさすべきを、これが末を知り顔に、たどたどしき真名書きたらむもいと見苦し」と思ひまはすほどもなく、責めまどはせば、ただその奥に、炭櫃に、消え炭のあるして、「草の庵を誰かたづねむ」と書きつけて取らせつれど、また返事も言はず。（『枕草子』「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」一三二六頁）

齊信の送ってきた詩句は『白氏文集』巻十七「廬山草堂の夜雨に独り宿し、牛二・李七・奥三十二員外に寄す」からの摘句で、『和漢朗詠集』巻下「山家」にも載る周知のものである。問われた「これが末」は「廬山雨夜草庵中」で、清少納言も知っていた。だが「これが末を知り顔に、たどたどしき真名書きならむもいと見苦し」という意識が彼女を止めた。『紫式部日記』は清少納言を「真名書き散らし」と言うが、ここでの清少納言は明らかに「真名書き」を避けている。そして彼女のとった行動とは、「廬山雨夜草庵中」を、漢詩そのままではなく和歌の下の句に翻案して返すことであった。

もちろん、清少納言が「廬山雨夜草庵中」と書いて返さなかった理由は、それではいかにも「これが末を知り顔」で芸がないということである。だが同時に清少納言は、齊信の「清げ」な筆跡に対し自分の字は「たどたどしき真名書き」で見苦しいという認識も見せている。それは彼女が女性であることによるだろう。清少納言は、ここでは自分を、女性は漢字に疎遠であるべきという規範の内に置いている。このことを小森潔氏は「枕草子はこの場面で、「女房〓女性〓和歌／殿上人〓男性〓漢詩文」という枠組みを仮構し、その上で、清少納言自身をその〈女性性〉の中に封じ込めているのである」とされている。⁽⁶⁾

とはいえ、この例で見過ごせないのは、清少納言が『枕草子』の本文を執筆するにあたっては「真名書き」を行なっていることである。齊信からの文「蘭省花時錦帳下」の部分がそれである。齊信が漢字で書き送って来たこの詩句を、清少納言は「らむしやうのはなのとき…」のように仮名で表記しなかった。もしそうしていたならば、ここには必ずや「と真名書きにて」云々の説明が必要である。だがその語句は無く、齊信の筆跡は清げであった、それに対して自分の真名書きの悪筆を思ったとあるのみである。そのことは、本文の表記が齊

信の手紙そのままの漢字表記だから説明が不要だったことを示唆している。清少納言は『枕草子』の文章には確かに「真名書き」を行い、女性性を逸脱している。つまり、男性との現実の応酬の場では真名書きを謹んで守旧派的弁えを見せ、いっぽう作品制作では必要とあれば漢字表記も辞さず積極的に漢詩文への親しみを記すというように、清少納言は場によって二つの規範を使い分けていた。⁽⁷⁾

次は紫式部である。彼女は『源氏物語』の中で次のように規範への抵触を回避している。

博士の人々は、四韻、ただの人は、おとどを始めたてまつりて、絶句つくり給ふ。興ある題の文字えりて、文章博士、たてまつる。(中略)おぼえ、心ことなる博士なりけり。かかるたかき家に生まれ給ひて、世界の榮花にのみたはぶれ給ふべき御身もちて、窓の螢をむつび、枝の雪を馴らし給ふ心ざしの、すぐれたる由を、よろづの事によそへなすらへて、心々に作り集めたる、句ごとにおもしろく、「唐土にも、もて渡り傳へまほしげなる、世の文どもなり」となん、その頃、世に愛でゆすりける。おとどの御はさなり。親めき、あはれなる事さへすぐれたるを、涙おとして、誦しさわぎしかど、「女の、え知らぬことまねぶは、憎きことを」と、うたてあれば、漏らしつ。(『源氏物語』「少女」③二六・二七頁)

夕霧に字をつける儀式の後、光源氏主催で詩会が催される。特に博士の作はすばらしく、世に賞賛された。また光源氏自身の作も、人々が涙して口にのぼせるほど流行したという。だがその具体的な詩句を、物語は記していない。それには、例えば場面が冗漫になってしまふなどといった、物語創作上の都合もある。だがお

そらく大きな理由は、もしも漢詩句を記した場合、現実にはそれは女性である作者の作なので、「女性は詩作をしない」という規範に間接的ながら抵触してしまうということであろう⁽⁸⁾。そこで作者は語り手の女房を登場させる。そしてその女房が、「女の、え知らぬことまねぶは、憎きことを」という社会通念に従って自粛したことにして、問題を回避している。『源氏物語』は虚構であり語り手も架空の人物なので、傍線部の草子地を即座に作者の考え方と見ることはできない。むしろここでは、作者は「女性と漢詩文の親疎における二重規範の板挟みになった女房」である語り手を意図的に造型し、その個性に語らせているものと考えるべきであろう。つまり作者は、守旧派に遵ずる語り手を隠れ蓑にして、自らを守っているのである。

このように、一条朝において女性と漢詩文素養について二重の規範が存在したことは、同時代の文学作品からも検証できることである。漢詩文に対し、女は疎遠でなくてはならない、だがある程度は親密であってよい、そうした微妙な状況が、それぞれに繊細な対応を生んでいた。和泉式部は規範侵犯をスリリングな冗談として恋に利用し、清少納言は場によって親疎の態度を使い分け、『源氏物語』作者の紫式部は語り手にかこつけて規範侵犯を回避した。漢詩文素養における女性であるがゆえの二重規範は一条朝においてごく一般的であり、女性たちは日常的にそれをこなしていたと考える。

二 清少納言批判——男女別の否定と規準の転換

では、こうした一般的状況のもとで『紫式部日記』消息体は何をどのように主張しているのだろうか。それ

を詳細に読んでゆきたい。なお以下の『紫式部日記』記事に付したローマ数字は、本稿冒頭で漢詩文素養関係記述として掲げた六箇所の数字に対応している。

I 清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち、真名書き散らして侍るほど、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。かく、人に異ならむと思ひ好める人は、必ず見劣りし、行末うたてのみ侍るは。艶になりぬる人は、いとすごうすろなる折も、ものあはれにすすみ、をかしきことも見過ぐさぬほどに、おのづから、さるまじくあだなるさまにもなるに侍るべし。そのあだになりぬる人の果て、いかでかはよく侍らむ。

(『紫式部日記』消息体一二六頁)

この清少納言批判は、従来、清少納言への対抗心や羨望など紫式部の心情の面で論ぜられることが多かった。⁽⁹⁾確かにその視点も有効ではあろう。だが本稿では心情ではなく、紫式部が清少納言を批判する論理の方に注目したい。それはその論理が、この箇所のみならず消息体の漢詩文素養関係記述全体を貫く、軸ともいうべきものだからである。

さて、右の傍線部は、およそ次のようなことを述べていると解釈する。清少納言はいかにも才知ありげに漢才を披露しているが、実際には程度不足の点が多い。このように、人と違っていたいとばかり考える女房は、一旦は目立ったとしてもやがて必ず評価が下がるものなので、将来は望み薄でしかない。ここに「女」という語が現れないことに、まず注目しなくてはならない。前項で確認したように、この時代、女性は漢詩文に対し

て複雑な位置取りをすることが社会から要請されていた。それは女性に偏ったものであり、男性には課せられなかった。そしてその規範の要請に、紫式部自身も『源氏物語』内では応じていた。ところがここで、紫式部は性別という変数を全く抜きにして話を進めている。では、紫式部は何をもって清少納言批判の拠り所としているか。それは学識であると考ええる。ここで紫式部が、清少納言の「さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべる」素養について「よく見れば、まだいと足らぬことおほかり」と、言下にその内容を指摘し、そのことを明らかに清少納言の欠点と見なしていることが理由である。

だが清少納言自身を始めとする当時の人々にとっては、この指摘は必ずしも当を得てはいなかったはずである。前項のように、清少納言の漢才は同時代の社会から十分に実力として認められ、むしろ賞賛されていた。では、そうした清少納言の能力とは、具体的にはどんなものだったろうか。Iは彼女を「人に異ならむと思ひ好める人」と言っている。清少納言が漢詩文素養によって人との違いを見せつけ賞賛された例は、『枕草子』にいくつも確認できる。たとえばよく知られる次の章段である。

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などしてあつまりさぶらふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。人々も「さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの宮の人にはさべきなめり」と言ふ。

（『枕草子』「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて」四三三・四三四頁）

定子の「香炉峰の雪いかならむ」という問いかけに対し、その典拠である白居易の詩に「香炉峰雪撥簾看」とあることに基づき、清少納言が御簾をあげて定子に外の雪を見せたところ、定子は喜び同僚女房たちが清少納言を賞賛したという。

この段で、清少納言は何を披瀝して定子から認められ、同僚からも賞賛されたのか。傍線部のように、問題の詩句自体は同僚たちが「さる事は知り、歌などにさへうた」⁽¹⁰⁾ っているという周知のものにすぎなかった。したがって、清少納言は知識で賞賛されたのではない。そもそも定子は雪が見たかった。だがそのことをわざと詩句を借りて表現し、清少納言に自らの意志が届くか試した。清少納言はそれに応えて評価された。つまり清少納言は、定子の意を汲んだことで賞賛されたのである。ならばこの段の二人にとって漢詩文素養とは、本来なら「雪が見たい」「ならば簾をあげましょう」というだけのやりとりで知的面白さを加味する工夫、つまり趣向である。清少納言はこの意識のもとに、いかにその趣向を成立させるか、洗練させるかに心を砕いた。定子はそれをよしとして笑い、同僚たちは定子後宮に於いてはこうあるべきと褒めた。このように定子後宮には、漢詩文素養は日常会話を知的に上質化する趣向だという共通理解があった。⁽¹¹⁾

前述のように、一条朝では漢詩文が貴族の間で遊興として流行した。それがきっかけとなって、漢詩文素養を知的お洒落として日常の場面に活用する態度が女性の側でも顕著になった。定子やその女房たち、なかでも清少納言はその典型なのであった。ところがその清少納言を、紫式部は批判する。紫式部は、漢詩文素養を趣向の具とは見ていないのである。

紫式部は清少納言を「まだいと足らぬことおほかり」と言う。どこが不足なのか。それは漢詩文についての

正しい知識に基づいた深い理解であり、言い換えれば学識である。下定雅弘氏によれば、白居易は本詩を詠んだ元和十二(八一七)年、江州に左遷されて閑職に倦んでいた。香炉峰を詠んだ詩にも折に触れその寂しさが顔を覗かせており、特に本詩は「たしかに廬山閑居の快い気分を詠じたものだが、白居易の魂が、どれほど深く長安に根づいているかを示す好例でもある」という。⁽¹²⁾ 暖かい部屋にいて美しい雪景色が見たいという風流はうわべのものであって、詩の真情は、官吏として世を兼済することを希求していたのである。とすれば確かに、定子や清少納言の理解は字面だけについての「いと足らぬ」浅薄なものと言えよう。もちろん本稿は、『枕草子』の本段に書かれるこの特定の事実が紫式部の清少納言批判の理由だと言うのではない。本段は清少納言を始め定子後宮が皮相的な素養を知的飾りとしていたことの典型例であり、おそらく紫式部は、清少納言の漢詩文素養に通底するこうした皮相性を素養不足と見なしていたと考えるのである。

Iからは、素養には男女の別は無関係であるとの認識のもと、趣向から学識へと漢詩文の規準を修正しようとする紫式部の主張が見て取れる。

三 自己抑制

前項の清少納言批判に次いで現れるのが、紫式部自身が家の女房から陰口を言われた体験を記す次の箇所である。なお福家俊幸氏は、清少納言を含むいわゆる三才女批評とその後の自身についての話題には連続性があり「自己の功を吹聴する清少納言と、反対に謙遜する自らを対置」していると指摘されており、⁽¹³⁾ 首肯すべきと

考える。

II 女房集まりて、「御前はかくおはすれば、御さいはひは少なきなり。なでふ女が真名書は読む。昔は経読むをだに人は制しき」と、しりうごち言ふを聞き侍るにも、物忌みける人の、行く末いのち長かめるよしども見えぬためしなりと、言はまほしく侍れど、思ひ隈無きやうなり。ことはたさもあり。

〔紫式部日記〕消息体一二八頁

女性が漢籍を読むことが「御さいはひは少なき」つまり不運に帰結するという傍線部Aは、女性は女性であるがゆえに漢詩文素養とは疎遠であるべきという規範に立脚するが、やや極端な物言いである。女房が主人紫式部を不運と見たのは、おそらく彼女の夫の藤原宣孝が結婚後数年で彼女と娘賢子をおいて死亡したことによる。有体に言えば、この女房は「漢籍など読むから夫に死なれるのだ」と言ったことになる。

前述のとおり、この時代一般に、漢詩文素養と女性とは基本的に疎遠なものと考えられていた。したがって、漢詩文素養を持つことは女性らしさを多少とも失うことを意味した。ここから漢詩文素養のある女性は縁遠いとか夫に離縁されるなどという風評が発生することは、ごく自然に想像がつく。しかし、そのことと夫に死別されることは全く別である。したがってこの言葉は、無根拠で非論理的な俗信と言える。

紫式部はこれを、傍線部Bのように「縁起かつぎが長生きしたためしはない」と一蹴している。つまり漢詩文素養に関する有意な言及ではないと否定する。ところがそれを口には出さない。理由の一つには「言はまほ

しくはべれど、思ひ隈なきやうなり」とあるように女房への配慮であった。そしてもう一つには「ことはたさもあり」実際死別されているのだし、という結果容認であった。死別が漢詩文素養を理由としないことは自明なのに、あたかも女房の言い分自体を認めるかのごとく、紫式部は引き下がるのである。

この紫式部からは二つの姿勢を読み取ることができる。一つは漢詩文素養について、それと女性とを分断する理不尽な俗信を笑殺する姿勢である。もう一つは、他者との関係において無配慮な言動や諍いを慎むという姿勢である。紫式部は、表立っては後者を優先した。前者は自分の胸に抱きつつ、それを表出することは自制したのである。⁽¹⁵⁾ こうして漢詩文素養に関する言及は、消息体の以後の部分で展開される、意思や能力の表出を人間関係に置いてどう制御してゆくかという論に回収されてゆく。そこには紫式部が同僚達からの偏見を「おいらか」な外見によって払拭したこと、「おいらか」を自分の本性にしようと陶冶したこと、その結果彰子の評価を勝ち得たこと⁽¹⁶⁾などが記される。

このように、『紫式部日記』消息体の文脈においてIIの家の女房の言葉は、まずはそれを否定することによって、漢詩文への親疎は性別に依らないという自らの信念を示す。次にはその信念を人間関係の中でことさらに主張しない、抑制的で思慮深い自分を示すことによって、話題を自己主張と人間関係の在り方という方向に膨らませる役割を果たしている。

四 漢詩文素養のあるべき用い方

人間関係の在り方への論は、不愉快な相手に対しても心中を「もて隠し、うはべはなだらか」であれとの結論を導いて終わり、次いで漢詩文関係の記事が立て続けに記される。

Ⅲ うちの上の、源氏の物語人に読ませ給ひつつ聞こしめしけるに、「この人は日本紀をこそ読み給ふべけれ。まことに才あるべし」と、のたまはせけるを、(引用者注・内裏女房左衛門の内侍はふと推しはかりに、「いみじうなむ才がある」と、殿上人などに言ひちらして、「日本紀の御局」とぞつけたりける、いとをかしくぞ侍る。この古里の女の前にてだにつつみ侍るものを、さる所にて才さかし出で侍らむよ。

(『紫式部日記』消息体一三四・一三五頁)

この箇所は、まず一条天皇が『源氏物語』とおぼしき『源氏の物語』を読んで作者の漢詩文素養を高く評価したこと、それによって内裏女房が紫式部に「日本紀の御局」とあだ名を付けたことを言う。吉井美弥子氏は「当時、物語は婦女子の読み物であったはずだ。が『紫式部日記』を見る限り、むしろあきらかに積極的な『源氏物語』読者としては、当代を代表する男性たちの姿が強くあらわされている」と鋭く指摘⁽¹⁷⁾されている。筆者はそれを紫式部自身による『源氏物語』への権威づけと考えるが、中でもこの一条天皇の評言はその最た

るものと言えよう。国家の君主である天皇が、『源氏の物語』作者について、日本の正史を持ち出してまでの「才」を褒めたというのである。天皇自身がどこまで本気でこれを口にしたかは不明であるが、少なくともこれによって、『源氏の物語』は、当時文芸としては最下層に位置した「物語」でありながら、正史の属する公的な漢学の世界に近いと認められたことになる。

さて、一条天皇の言葉を聞いた内裏女房が紫式部につけた「日本紀の御局」というあだ名を、筆者は「日本紀講筵の講師役女房」の意味と解している。⁽¹⁸⁾これに紫式部は「さる所にて才さかし出で侍らむよ」と反駁し、公的な場での披露は「さかし出で」つまりひけらかしにあたるから控えるという認識を見せている。それでは紫式部が『源氏物語』において一条天皇にも看破されたような漢才を披露していることを、どう解釈すればよいのだろうか。筆者はかつて「表現主体として物語中に漢文素養を盛り込むことは、それを媒介として読者に素養を披露することである。これは紛れもない「ひけらかし」と言える⁽¹⁹⁾」と考えた。だがⅢの文面による限り、紫式部はそう考えていないようである。

先にも見たように、清少納言のような女房にとっては現実の宮廷社会こそが自分の漢詩文素養を發揮する場であった。一方これも前にも述べたように、漢詩文作品や故事を典拠に和歌や和文を作ることは、男女を問わず広く行われた行為であった。紫式部は、前者を「ひけらかし」と戒め、後者をこそ自分の素養發揮の場と決めたのであろう。もちろん前項で見たように、『源氏物語』中であれ詩句そのものを具体的に記すことはよくないので、しない。だが史記の故事や白詩の発想、表現など漢詩文由来の要素を『源氏物語』にふんだんに盛り込むことは、してよい。『源氏物語』の本文と『紫式部日記』の記述から帰納すれば、紫式部はそのように

決めそれに従ったのだと考える。

この態度は少なくとも見かけ上、紫式部を守旧派的女性の範疇に置く。だが彼女が性差を根拠にこうしているのではないことは、Ⅰの清少納言批評、Ⅱの俗信の分析で既に確認したところである。紫式部の論理によれば、彼女はあくまで、人間関係の現場において漢詩文素養をひけらかすことはしない。他方、人前ではなく文芸の中で漢才を見せることは、男女を問わず「才さかし出で」には当たらない。自らそう基準を定めてそれに従っているから、天皇から『源氏の物語』中の素養を指摘されても、紫式部は悪びれず、むしろ自らの素養を認めているのである。

こうしてⅢは、天皇の言葉によって自作『源氏の物語』の漢詩文素養の正統性を示し、また自分の漢詩文素養表出の場は作品の中であり、公的な場ではないと主張している。そして続くⅣでは、天皇に評価された自らの学識の基盤を明かしている。

Ⅳ この式部の丞といふ人の、童にて書読み侍りし時、聞きならひつつ、かの人は遅う読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞさとく侍りしかば、書に心入れたる親は、「口惜しう。男子にて持たらぬこそ、幸ひなかりけれ」とぞ、つねに嘆かれ侍りし。

(『紫式部日記』 消息体一三五頁)

家で漢学を学習する兄弟の声、それが紫式部の漢学素養の源泉だった。彼女は兄弟より明晰で、父はそれを残念がったという。⁽²⁰⁾父は「書に心入れたる親」で、男性である兄弟には期待していたと思われるので、兄弟の

学習内容は、幼学であれ父の意に適う正統のものであったろう。紫式部はそれを日常的に聞いていたという。また、父の慨嘆「口惜しう、男子にてもたらぬこそ幸ひなかりけれ」は、裏返しながら「もし男子ならば父に幸運をもたらした程の優秀さだった」ということである。文章生出身の父が言う「幸ひ」とは、おそらく息子が父と同じ道に進み漢詩文素養によって朝廷に貢献し出世を果たすということであろう。つまり紫式部の漢詩文素養は、少なくともその学習の源泉と方向性においては、文章道を志す男子と同等だったのである。さらに父が「つねに」嘆いていたということは、彼女の耳学習が短期間では打ち切られず、一定程度継続したことを示している。

ここまできて、紫式部の主張はようやく輪郭を露わにする。漢詩文素養について紫式部が否を唱えるのは、性別を理由に制限を設ける考え、遊興的態度、宮廷など現実の場でのひけらかしである。いっぽう是とするかまたは自らの事実として示すのは、十分な学識、文芸作品内に限つての披歴、儒者と同じ学問基盤である。『紫式部日記』消息体の漢詩文素養に関する記述は、すべてこの考え方の上にあると言える。

さて、家庭内で漢詩文を享受していた紫式部だが、やがて態度を改めたという。

V それを、「男だに、才がりぬる人は、いかにぞや、はなやかならずのみ侍るめるよ」と、やうやう人の言ふも聞きとめて後、「一」といふ文字をだに書きわたし侍らず、いとてづつにあさましく侍り。

（『紫式部日記』消息体一三五・一三六頁）

ある人の言葉によって、一という字も書かぬほど素養を隠すようになったというのである。これについては、後に別に詳しく考えたい。とりあえずここでは、「男だに云々」という人の言葉は男性への目配りに基づいており、言外に「男以上に女は」という意味を含むとはいえ、紫式部を動かしたのは男女を包括した論であったことを確認しておく。

こうして紫式部は漢籍を遠ざけ素養を隠蔽していたが、思いがけない機会を得て漢詩文素養を発揮することになった。これが消息体の漢詩文関係記述の最後のものである。

VI 読みし書などいひけむもの、目にもとどめずなりて侍りしに、いよいよかかること聞き侍りしかば、「いかに人も伝へ聞きて憎むらむ」と恥づかしさに、御屏風の上に書きたることをだに読まぬ顔をし侍りしを、宮の、御前にて文集のところどころ読ませ給ひなどして、さるさまのこと知ろしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬもののみまひまに、おとしの夏頃より、楽府といふ書二巻をぞ、しどけながら教へたてきこえさせて侍る。隠し侍り。宮もしのびさせ給ひしかど、殿もうちもけしきを知らせ給ひて、御書どもをめだう書かせ給ひてぞ、殿は奉らせ給ふ。

(『紫式部日記』 消息体一三六頁)

中宮彰子が漢詩文への興味を示し、それに応じて紫式部は『白氏文集』の「新楽府」を進講したという。これが従来言われたような胎教でなく、また定子の漢詩文素養に対抗してのものでもなかったことを、かつて考

えた。⁽²¹⁾そこで考察したことは次のとおりである。

彰子はおそらく、Ⅲの一条天皇の批評に触発されて漢文に親しむ心を起こし、紫式部にそれを仄めかした。その根幹に一条天皇の世界を知りたいという思いがあることを察した紫式部は、『白氏文集』の中でも最も一条天皇の好みに沿った作品「新楽府」をテキストに選んだ。「新楽府」は儒教色が濃く堅い作品で、これを読んで日常の知的装飾に役立つものではなかった。が、彰子の目的はそこにはなかったので、学習は二年もの間粘り強く続いている。また道長も一条天皇の漢学傾向を知っているので、彰子に漢籍を贈るなどして応援している。すなわち、彰子の「新楽府」学習の意味は、一条天皇の内面を理解しそれに寄り添いたいという思いにあり、紫式部はそのために尽力したのだった。

旧稿ではこのように彰子の側から漢学学習の意味を考えたが、ここで紫式部の側に立ってみれば、おそらく紫式部にとってこの進講は、自らの漢学素養を發揮する方法としては、『源氏物語』の創作と並んで理想的なものだったと考えられる。請われて教えるのであり、外部には隠しているもので、ひけらかしには当たらない。またおのずと一部に知られることにはなったが、容認されている。それは中宮と天皇との関係をつなぐことに資するからであり、その意味では女房として究極の貢献を果たしているとも言える。女性と漢詩文素養との二重規範の中、素養との付き合い方を模索してきた紫式部だが、文芸創作以外にも漢文進講という形で素養を特技として活かし、中宮を支えることができたのである。

また、それだけではない。Ⅵが極めて政治的な意味を含むことを看過してはならない。「新楽府」は、君主としての在り方、民の苦しみ、税の理不尽、制度の諸矛盾などを内容とした五十首の詩から成る。これを彰子

が読むことは、白詩を通じて儒教的政治観を学ぶことを意味する。たまたま一条天皇が儒教的政治を理想としていたことを直接の動機としつつも、ここには、儒教の学識を取り入れて自ら努力と研鑽を続ける中宮彰子がいる。紫式部は、彰子をそうした中宮へといわば教導したことになる。漢詩文素養についての『紫式部日記』消息体の主張は、ここに最も先鋭化する。すなわちそれは、趣向・遊興という生活の具から本来あるべき学識・政治哲学へと漢詩文素養の位置づけを正そうという主張であり、またそれと同時に、一条朝前期の定子・清少納言・『枕草子』的文化を退け、日記現在の彰子・紫式部・『源氏物語』的文化をこそ正統とする主張であった。これこそが消息体の漢詩文素養関係記述の趣旨であると本稿は考える。

五 才がりぬる人

ここで、先に措いたVについて考えたい。

V それを、「男だに、才がりぬる人は、いかにぞや、はなやかならずのみ侍るめるよ」と、やうやう人の言ふも聞きとめて後、「一」といふ文字をだに書きわたし侍らず、いとてづつにあさましく侍り。

(『紫式部日記』消息体一三五・一三六頁)

幼少期に父に嘆かれたことは、紫式部にとって漢詩文享受を止める理由にはならなかったらしい。しかしや

がて、誰かが言った「男だに、才がりぬる人は、いかにぞや、はなやかならずのみ侍るめるよ」という一言を聞いて、紫式部は素養をひた隠しにするようになったという。「一」といふ文字をだに書きわたし侍らず」とはいかにも極端だが、この言葉は紫式部をそうした行動に走らせる力を持っていたことになる。それはなぜだろうか。

筆者はかつて、この言葉の「男であっても漢才をひけらかした人は、なぜか出世しない」という指摘には実例が存在し、そのことが紫式部に対して説得力を持ったものと考えた。そしてその実例とは、紫式部の父藤原為時のような寒家の文人であると想定した⁽²²⁾。だが、今それを改めたい。「才がりぬる人」という言葉の語義が「漢才をひけらかした人」であることを正しく尊重すべきであった。地味な実務家文人たちが本務に漢才を用いたことに、ひけらかすという言葉はそぐわない。ではこの言葉に匹敵するような、漢学素養を必要外に過剰に披露した人物で、出自に比して華々しい栄達を遂げられなかった男性の実例はあるか。まさにそのような人物は実在した。しかも彼は、そうした人物として衆人の記憶に刻まれる存在であった。

その彼とは、定子の兄藤原伊周である。彼が並外れた漢詩文素養の持ち主であったこと、しかしそれが政治哲学といったものでなく、むしろ典型的な知的装飾であったことは、『本朝麗藻』等に収められた彼の作品、また『枕草子』に記された彼の日常会話や朗詠などの在り方に明らかである。例えば『枕草子』には、清涼殿に隠されていた鶏が深夜に大声で鳴き、一条天皇を始め人々が目を覚ました時に、伊周が当意即妙な朗詠を行ったことが、次のように記されている。

皆人起きなどしぬなり。上もうちおどろかせたまひて、「いかでありつる鶏ぞ」などたづねさせたまふに、大納言殿の、「声、明王のねぶりをおどろかす」といふことを、高ううち出だしたまへる、めでたうをかしきに、ただ人のねぶたかりつる目もいと大きになりぬ。「いみじきをりのことかな」と、上も宮も興ぜさせ給ふ。なほ、かかることこそめでたけれ。

（『枕草子』「大納言殿まありたまひて」四四七頁）

この時伊周が朗々と詠じた「声、明王のねぶりをおどろかす」とは、『和漢朗詠集』にも採られる都良香の「漏刻策」の句「鶏人曉に唱ふ 声明王の眠りを驚かす」の後半部である。題名のとおり良香の詩は文章得業生の試験問題に答えた対策、すなわち答案である。対策では政に関わる問題を議論することが求められる。本詩の場合でも「鶏人」は時を告げる官人のことであり、鶏人が正しい時刻に天子を起こすことよって時刻が正しく掌握され、政が正常に運ぶことを陳べるのが本来の意と言える。しかしこの場面での伊周は、詩句のそうした本来的な意味を全く無視し、むしろ「鶏人」ならぬ「鶏」そのものの声で天皇が起きたと笑いを取るものである。一条天皇を「明王」に重ねて持ち上げてはいるが、それだけである。しかし天皇も定子も彼を称賛したと『枕草子』は言っており、興趣としては朗詠は成功したと言える。この段に描かれる彼の漢詩文に対する認識が、先と同じ『枕草子』の「香炉峰の雪」の段に見て取れた定子や清少納言のそれと重なることを確認したい。そこに共通するのは、漢詩文素養を発揮することは日常会話を知的に上質化する趣向であり、その本質は遊興であるという認識である。

彼はこうした認識の上に立って、自らの漢詩文素養を惜しみなく誇示した。だがそれに眉を顰める向きもあ

った。例えば寛弘五(一〇〇八)年十二月、彼が彰子の産んだ敦成親王の誕生百日の儀で和歌序を作り献上した⁽²³⁾ことを、藤原実資は次のように批判している。

帥、紙筆を乞ひ取りて序題を書く。満座頗る傾き奇しむこと有り。帥丞相を擬するも、何ぞ輒ち執筆せんや。身に亦忌諱有り。思ひ知らざるに似たり。大底心無きか。
(『小右記』寛弘五年十二月二十日)

「帥」と呼ばれるのが伊周である。実資は、伊周が序題を書いたことに、その場にいた全員が首をかしげたという。理由は伊周の身の「忌諱」、すなわち長徳の政変によって一時朝廷から咎めを受け、この時もまだ完全には政治的復活を遂げていないことであつた。それを憚りもせずでしゃばって序を書いた伊周を、実資は思慮に欠けると言っている。

このように、伊周は「才がりぬる人」として周知の存在であつた。そしてもう一つ、彼について周知のことといえは、『小右記』で実資の記すように、長徳の政変で身を滅ぼしたことである。彼は当初、中関白家の嫡男として出世し、道長をも凌駕した。しかし二十二歳であつた長徳元(九九五年)、関白だつた父藤原道隆の死をうけ内覧の職を道長と争つて敗れるや、翌長徳二(九九六年)には長徳の政変を引き起こして、内大臣から大宰権帥へと降格のうえ左遷された。政変は弟の隆家や母方の高階氏をも巻き込み、一家は没落し、絶望して定子は出家した。一年後には都に呼び戻されたが、その後も彼が実質的には復権できなかつたことは、実資の書きぶりによく表れている。

ただ漢才を誇示して失脚したのは、独り伊周だけではなかった。彼とともに失脚した高階氏⁽²⁴⁾などにも、同様の傾向が見受けられる。ここから本稿は『紫式部日記』がVに僅かに書き留める世人の言葉「男だに、才がりぬる人は、いかにぞや、はなやかならずのみ侍るめるよ」は、伊周や高階氏など中関白家とその周辺の人々の事実に基づいて発せられたものであり、紫式部も同様の認識を以てこれを聞いたと憶測する。人物名をことさらに挙げないことは、実例たちが周知であることと禍々しいことに依るのではないか。この言葉の「男だに云々」という表現は言外に「況や女は」の意を含むが、当時女性で漢才を誇示した代表は伊周の母や姉妹、つまり高階氏と中関白家の女性たちであった。彼女たちは長徳の政変後六年の間に母と三人の娘が死亡、残る一人の姉妹も不遇の人生を送った。男女ともに漢才を誇示し、男子たちは失脚、女たちは悲劇に見舞われたのが、高階氏と中関白家の末路であった。後年『大鏡』は伊周について「御才日本には余らせ給へりしかば、かかること(引用者注・流刑の禍)もおはしますにこそ侍りしか」と評し、彼の母について「女のあまりに才かしこきは、もの悪しき」と人の申すなるに、この内侍、後にはいみじう墮落せられにしも、その故とこそはおぼえ侍りしか」と評する。中関白家の漢才を災禍に結び付ける見方を鮮明にしているのである。『大鏡』は院政期の成立であるが、そのような見方の種は夙に囁かれており、⁽²⁵⁾『紫式部日記』の人の言葉はその一つだったのでないかと考へる。

もしもこの憶測が正しいとすれば、『紫式部日記』消息体の漢詩文素養関係の記述は、さきに定子と清少納言を批判したばかりではなく、伊周をも加えた中関白一家の在り方を否定していることになる。いっぽう漢詩文素養関係記述の最終部分であるVIの末には、彰子のために「新楽府」の豪華本を進上する道長の姿が描か

れている。これを考慮すれば、漢詩文素養関係の記述は、紫式部と彰子のみならず道長をも含めた、つまり道長家の文化的在り方を是として終わることになる。すなわち、『紫式部日記』の漢詩文素養に関わる主張は、一条朝の文化を、その前半期を担った中関白家のものから現在の道長家のものへと質的に転換させようという、極めて政治的な主張なのであった。

これらの記述は、基本的には紫式部個人の信念を記したものであるだろう。だがそこには同時に、現在の政治状況を反映した、女房としての政治意識が見て取れると考える。

文中に引用した作品および史料の本文は、次に依った。

『内裏歌合 天徳四年』：新編国歌大観

『紫式部日記』『和泉式部日記』：角川ソフィア文庫

『枕草子』『源氏物語』『大鏡』：小学館新編日本古典文学全集

『小右記』：大日本古記録

注

(1) 「〇真名書き散らし」ということ（『国語国文』一九九四年四月）。

(2) 関口裕子氏「平安時代の男女による文字（文体）使い分けの歴史的前提―九世紀の文書の署名を手がかりに―（笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集』下、吉川弘文館、一九九三年九月）、佐藤宗諄氏「女流文学形成の社会的背景」（『日本女性生活史』1、東京大学出版会、一九九〇年）、小松登美氏「和泉式部と漢学」（『跡見学園短期大学紀要』13、一九七七年三月）、志村緑氏「平安時代女性の真名漢籍の学習―一世紀ごろを中心に―」（『日本歴史』

一九八六年六月)等による。

- (3) 『河海抄』引用の藤原穩子の日記『太后御記』の原形は仮名書きか漢文か不明とされる。(石原昭平氏「日記文学の発生と暦」『平安文学研究』三一、一九六三年)。
- (4) 「それはまことしき文者にて、御前の作文には、文奉られしはとよ。」(道隆伝)
- (5) 注2小松氏論文。
- (6) 『枕草子大事典』(勉誠出版、二〇〇一年)「第78段」三三三二頁。
- (7) 写経等にもこうした所謂「場の許し」があり女性も躊躇なく真名を書いたと考えられる。
- (8) 他の理由としては、作者に作詩の能力がないか不足であるということも考えられる。
- (9) 萩谷朴氏「枕草子を意識しすぎている紫式部日記―反発による近似、比較文学の一命題」(『二松学舎大学論集』一九六七年)など。
- (10) 『白氏文集』卷十六「香炉峰下に新たに山居をトして草堂初めて成り、偶東の壁に題す、五首」の第四首。
- (11) 中島和歌子「枕草子「香炉峯の雪」の段の解釈をめぐって―白詩受容の一端―」(神戸大学「研究ノート」の会『国文学研究ノート』第二五号 一九九一年三月)。
- (12) 『白氏文集を読む』(勉誠社、一九九六年)前篇第五章「白居易と江州」二二三頁。
- (13) 『紫式部日記の表現世界と方法』(武蔵野書院、二〇〇六年)Ⅰ『紫式部日記』の表現世界 第二章 消息的部分の展開と方法 三「いわゆる三才女批評の方法」一四三頁。
- (14) 『源氏物語』「帚木」で、漢詩文素養に秀でた博士の女が恋人の藤式部に捨てられることも、現実の才女蔑視の一端を戯画的に映したものと考えられる。
- (15) 箇所Ⅱについては、注1拙稿でも詳細に考察した。
- (16) 詳細には拙稿「拒絶と順応―女房紫式部への自己陶冶―」(南波浩編『紫式部の方法』笠間書院、二〇〇二年)で考察した。

- (17) いずれも『読む源氏物語 読まれる源氏物語』（森話社、二〇〇八年）第二十八章『紫式部日記』論——「女／男へのまなざし」四六二頁。
- (18) 『紫式部日記』消息体の主張——漢詩文素養をめぐって——（『紫式部日記の新研究 表現の世界を考える』新典社、二〇〇八年）。
- (19) 注1拙稿。
- (20) 旧稿（注1拙稿）では、この箇所は漢詩文を「自分が自発的に学習したのではないという主張」であり「父が薫陶したのではないということ」であり、父と自分は女性が漢詩文に疎遠であるべきという「社会通念の埒内のものだった」と言おうとしていると指摘した。
- (21) 「彰子の学び——『紫式部日記』「新楽府」進講の意味——」（『国語国文』二〇〇七年一月）。
- (22) 注1拙稿。
- (23) 『本朝文粹』卷十一。
- (24) 伊周の外祖父高階成忠や、その男の信順、道順など。
- (25) 『小右記』（寛弘八年十二月十五日）は伊周の息子道雅について「成長自禍殃家、必又有凶歟、万人所推也」と記し、中関白家を家ぐるみ禍々しい存在と見ている。